

平成29年度資源評価報告書(ダイジェスト版)

[Top](#) > [資源評価](#) > [平成29年度資源評価](#) > [ダイジェスト版](#)

標準和名 イカナゴ

学名 *Ammodytes japonicus*

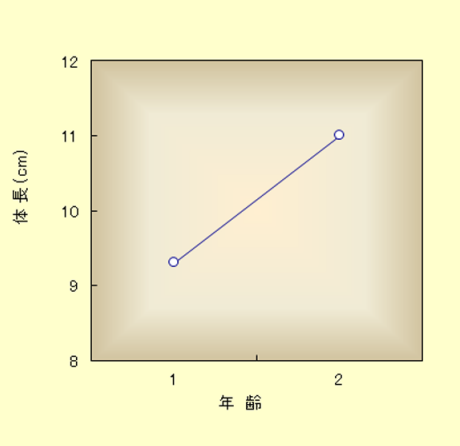
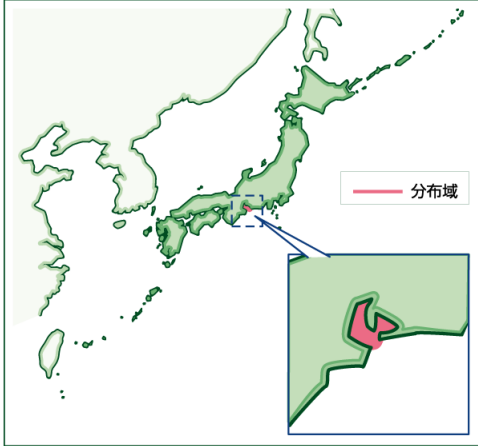
系群名 伊勢・三河湾系群

担当水研 中央水産研究所



生物学的特性

寿命： 2～3歳
成熟開始年齢： 1歳 (100%)
産卵期・産卵場： 12～1月、伊勢湾の湾口部付近から渥美外海の礫砂の海底
食性： 動物プランクトン（カイアシ類が主体、ヨコエビ類、ヤムシ類、アミ類）
捕食者： 仔稚魚期には多様な浮魚類やヤムシ類、未成魚および成魚期にはヒラメ等の底魚類

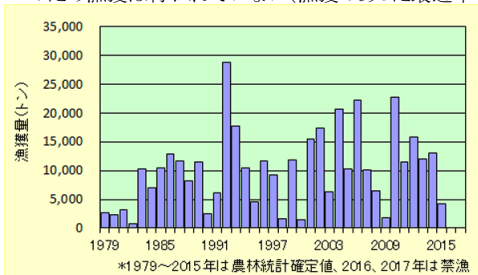


漁業の特徴

主な漁獲対象は、稚魚(シラス:2～3月)と幼魚(4～5月)で船びき網によって漁獲される。漁獲量の90%以上が、2～3月の漁期開始後の約2週間で水揚げされる。本系群は2007年以降、20億尾以上をとり残す日を終漁日とする実効的な資源管理が実践されてきた。2016年と2017年は、漁期直前の調査で魚群が極端に少ないことが確認されたことから、愛知、三重両県の漁業者代表協議によって親魚保護の目的で禁漁が決定した。

漁獲の動向

1974年に2.7万トン台であった漁獲量はその後大きく減少し、1982年に699トンにまで落ち込んだ。1983年以降は再び増加したが、その後は1,507(2000年)～2.9万トン(1992年)の間で大きく変動している。2016年と2017年は禁漁のため漁獲は行われていない(漁獲のあった最近年である2015年の漁獲量は4,165トン)。

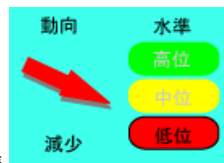


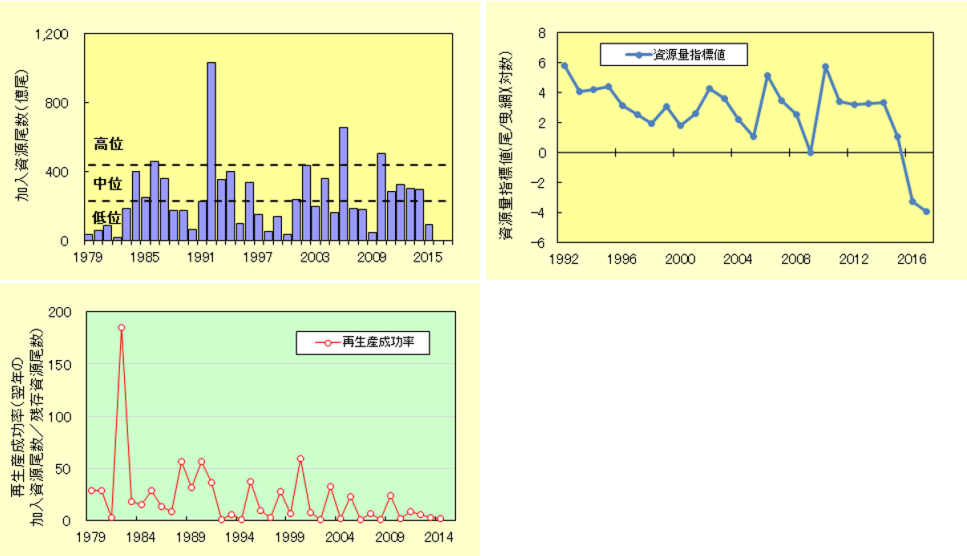
資源評価法

水準と動向の判断は、2015年まではDeLury法により得られた加入尾数及びその推移を用いて判断していたが、2016年と2017年は禁漁のため漁期中にDeLury法の適用が不可能である。そのため、漁期直前に行った新規加入量調査結果(2月上旬の伊勢湾内におけるイカナゴ仔稚魚の平均分布密度の対数値)を資源量指標値として用い、2015年の加入資源尾数を基準にした比較を行い、2017年の資源の水準と動向を判断した。

資源状態

加入資源尾数は、1979～2015年の間で70倍以上の変動幅を示している。資源水準は過去37年間(1979～2015年)の加入資源尾数のうち突出して多かった1992年を除いた最大値と最小値の差を三等分し、高位、中位、低位とした。2017年の資源量指標値をみると、1992年以降で資源水準が低位でその中でもとりわけ水準の低かった1998年、2000年、2009年、2015年、2016年と比較して最も小さかったことから、水準は低位と判断した。また、直近5年間(2011～2015年)の加入資源尾数の推移が減少していることに加え、2017年の資源量指標値は2016年よりもさらに低下したことから、動向は減少と判断した。加入資源尾数は1992年以降では過去最低水準にある。2012年以降は再生産成功率が3年連続で減少している。





管理方策

資源管理指針・計画上の親魚量20億尾以上を確実にとに残すため、資源水準および動向に合わせた漁獲を行うことを管理方策とした。2016年と2017年は2年連続して禁漁となり加入資源尾数及び漁獲物の平均体重が得られないことから、2018年ABCは算定不可能である。伊勢湾のイカナゴでは、とに残し親魚量一定方策による加入乱獲抑制等に取り組んでいる。禁漁は産卵親魚を確保するために最も効果的な措置である。2016年と2017年の加入水準が低位にとどまり回復しなかったのは、夏眠魚の夏眠中減耗によると考えられることから、夏眠魚調査を通して夏眠魚の肥満度や生残について注視していく必要がある。

管理基準	Target/Limit	2018年ABC (千トン)	漁獲割合 (%)	F値 (現状のF値からの増減%)
Bfishable	Target	—	—	—
	Limit	—	—	—

- Limitは、管理基準の下で許容される最大レベルの漁獲量。Targetは、資源変動の可能性やデータ誤差に起因する評価の不確実性を考慮し、管理基準の下でより安定的な資源の増大または維持が期待される漁獲量
- $ABC_{target} = \alpha \cdot ABC_{limit}$ とし、係数 α には標準値0.8を用いた
- 2016年と2017年は2年連続して禁漁となり、加入資源尾数及び漁獲物の平均体重が得られない
- 2018年ABCは算定不可能
- なお、2017年ABCはBfishable(20億尾をとに残すとに残し資源量一定方策)により算定した

資源評価のまとめ

- 資源量指標値の推移により、資源水準は低位、動向は減少と判断された
- 2017年の資源量指標値はとりわけ資源水準の低い年と比較して最も小さく、加入資源尾数は過去最低水準にある
- 再生産成功率は2012年以降3年連続で減少した

管理方策のまとめ

- 資源管理指針・計画上の親魚量20億尾以上を確実にとに残すため、資源水準および動向に合わせた漁獲を行うことを管理方策とした
- 2016年と2017年は禁漁のため、2018年ABCは算定不可能である
- 産卵親魚の確保のための効果的な措置を行うため、今後も親魚保護の取組を継続することが必要
- 夏眠魚調査を通じて夏眠魚の肥満度と生残について注視することが必要

執筆者: 山本敏博・黒木洋明

資源評価は毎年更新されます。